

令和元年6月27日現在

機関番号：32705

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01776

研究課題名（和文）家族力を高める子ども・子育て支援へのムーブメント教育適用に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical Research on the Application of Movement Education to Support for Children and Childrearing to Enhance Family Power.

研究代表者

飯村 敦子（IIMURA, Atsuko）

鎌倉女子大学・児童学部・教授

研究者番号：70326982

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：子育てに不安や悩みを抱える母親の増加、養育力の低下や児童虐待等、子どもを取り巻く問題が複雑化する中、その健やかな育ちを支える子育て支援の方法が模索されている。また、少子化や核家族化による家族力の低下が指摘され、養育者のエンパワメント向上に直結する子育て支援の展開が急務である。本研究は、乳幼児とその母親を支えるムーブメント教育による子ども・子育て支援プログラムを開発・適用すると共に、母親と子育て支援者のエンパワメントという視点からその効果を検証した。これにより、ムーブメント教育による子育て支援の方法について構築することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特色は、子育て支援の具体的な方法として、遊びを原点とした発達教育としての「ムーブメント教育理論」にもとづいて、その方法論を提示し子育て家庭に還元できる点にある。子育て支援において何を提供するのか、その具体的な方法論が求められる現在、本研究で得られた研究結果は、子ども・子育て新制度に基づく地域子育て支援拠点事業等の質向上に寄与すると考える。

研究成果の概要（英文）：Problems surrounding children are becoming more complex, such as an increase in mothers who have anxiety and worries in childrearing, a decrease in childcare skills and child abuse. While declining family power is pointed out due to the falling birthrate and the trend toward the nuclear family, there is an urgent need to develop childcare support that is directly linked to improving the empowerment of carers. In this study, we developed and applied a support for children and childrearing program by movement education to support infants and their mothers and verified the effect from the viewpoint of empowerment of mothers and childcare supporters. This enabled us to construct a method of parenting support by movement education.

研究分野：発達教育学

キーワード：子育て支援 ムーブメント教育 家族 エンパワメント

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成 24 年、政府が国会に提出した「子ども・子育て関連 3 法案」は、同年 8 月に成立、交付された(内閣府・文部科学省・厚生労働省,2013)。我が国は 1994 年のエンゼルプランに始まり、新エンゼルプラン(1999 年)、子ども子育て・応援プラン(2004 年)、「子どもと家族を応援する日本」重点戦略(2007 年)、子ども・子育てビジョン(2019 年)等、次々と少子化対策が講じられたにも関わらず、2005 年の出生数は 106 万人、合計特殊出生率は 1.26 と過去最低を記録した。この背景には、子どもや子育てをめぐる厳しい環境、核家族化や地域のつながりの希薄化等、子育てに不安や孤立感を抱える母親の現状がある(子育て環境研究会,2006)。

我々は、これまで 30 年以上にわたり、障害乳幼児とその家族を対象に福井県・石川県・兵庫県の保育所と協働して、障害乳幼児の発達と家族支援のための地域ネットワークの構築とムーブメント教育(M.Frostig・小林,1970/2007)による発達支援研究に取り組んできた(小林他,2012)。平成 13 年度から 15 年度の科学研費補助成事業 0 歳から 3 歳の障害乳幼児を対象とする Play-Based Assessment の開発と障害乳幼児の家族参加型療育メニューの開発(小林・飯村,2006)は、本研究に深く関わる先行研究である。それは、遊びの要素を持った動的活動によるムーブメント教育が子育て支援に活用できること、障害乳幼児のために開発した家族参加型メニューを発展させることで、子育て支援の home-based program を構築できるからである。また、ムーブメント教育法による子育て支援プログラムの開発に関する調査研究(小林・飯村,2006)は、本研究の基盤となる研究である。この研究では、母親の「子育て中の気持ち」「子どもから見た自分のイメージ」「子どもに対する自分のイメージ」等、育児充足感に関連する調査を通して、自らの子育てに自信を持っていない母親の実態を明らかにした。そして、子育てに対する充足感、親としての自分に対する肯定感情は、母親と子どもとのポジティブな関わりによって育まれることを検証した。さらに、平成 23 年度から 25 年度の科学研究費助成事業、家族参加型の障害児保育ニーズアセスメントの開発研究では、家族参加による包括的アセスメントに基づく支援の重要性を明らかにした。これら一連の研究は、本研究の「家族力を高める子ども・子育て支援の意義について子どもを取り巻く環境としての人(母親や家族、支援者)のエンパワメントから捉える」という視座につながった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、乳幼児と母親を支えるムーブメント教育による子育て支援プログラムを開発し、保育所を中心とする地域での子育て支援事業で適用すると共に、母親と子育て支援者のエンパワメントの獲得という視点から、その効果を検証することである。

3. 研究の方法

(1) ムーブメント教育による家族力を高める子ども・子育て支援プログラムの開発

ムーブメント教育による子ども・子育て支援教室において、子どもの発達段階に基づくプログラム、Baby ムーブメント(対象:0~12 ヶ月児)、Walkers プログラム(対象:13~18 ヶ月児)、Runners プログラム(対象:19~36 ヶ月児)を開発する。プログラムの開発にあたっては、0 ヶ月~72 ヶ月の感覚運動、言語、社会性の発達段階を詳細に評定できるムーブメント教育・療法アセスメント(MEPA-R)の項目を参考に親子で取り組める遊びのプログラムを構造化する。開発したプログラムは、保育所を中心とした地域の子育て支援事業等で活用する。

(2) オーストラリア(ニューサウスウェルズ州)における乳幼児とその家族への支援

オーストラリア(ニューサウスウェルズ州)における乳幼児並びに障害のある子どもと家族への支援を明らかにするために、現地視察を行った。具体的には、ヤームグアングアニューイングランド大学チャイルドケア・センター、ペダル幼児期早期介入センター、インファンツ・ホ

ームの3つの幼児教育・療育施設とミンバン・プリスクール・プライマリースクール、ケアンズフットスクール、セント・ジョージ・スクール、ジャイアント・ステップスの4つの特別支援学校である。

4．研究成果

(1) ムーブメント教育による家族力を高める子育て支援プログラムの開発

本研究により開発された子育て支援ムーブメントプログラムの一部を報告する。

Baby ムーブメント(対象:0~12ヶ月児)この年齢の子どもには、リラックス・ムーブメントが重要である。子どもは、まだ腕や脚を自由に動かさず、限られた動きがその大半なので、リラックス・ムーブメントでその感覚を緩めることになる。

・身体全体のリラックス:タオルケット等に乳児を仰臥位で寝かせる(可能な限りはだかで行うと良い)。大人は寝ている子どもと向い合って子どもの両手を取り、横(外側)に広げたり(ストレッチ)胸の上で交差させたりリズムカルに行う。

・関節可動域を広げる:子どもの両脚を持って、股関節を中心に、ゆっくりと可動域を広げるように動かす。ときどき屈曲させたり伸展させたりする。子どもの表情に合わせてゆっくり規則的なリズムで行うとよい。

・脚のリラックス:床に寝かせてた子どもの膝関節の裏側に、大人の指(手)を入れて、脚を同時に持ち上げたり下げたりする。慣れてきたら一方の足を胸の方に持っていきように、交互に膝を伸ばしたり縮めたりして動かす。

・腕と脚を動かす:仰向けに寝ている子どもの腕(脚)を持ちあげ、その腕(脚)をブラブラとゆっくり動かす。声掛けや歌を歌いながら行うことで、見つめ合いの関係が生まれ、身体だけでなく子どもの情緒(心)もリラックスする。

・身体をやさしくマッサージ:温もりのある気持ちのよいマッサージは、乳児の身体の感覚器の刺激として、また末梢の血流の循環刺激である。皮膚を通しての感覚刺激は、触覚、筋感覚への刺激となり、中枢神経系の健康の座である脳幹を活性化することに繋がる。柔らかいスクラブや布手袋で行うことで気持ち良さが増す。

・タッピングや腹臥位でのムーブメント:乳児の身体をタッピング(軽く叩く)することは、筋感覚刺激として筋肉に張りをもたらす。この感覚刺激が、心身の正常発達に必要な身体像(ボディ・イメージ)を育てることになる。ロールマットを胸の下に入れて、姿勢を安定させてタッピングや軽い動きのムーブメントを取り入れる。

Walkers プログラム(対象:13~18ヶ月児):乳児の運動発達は、抗重力運動と頸の力と体幹運動の発揮という3つの機能が特徴である。子どもは少しずつ自分の両腕を使って身体を持ち上げていく。運動の拡大は中枢神経の発達と併せて、少しずつ身体意識に関わる認知も育ってきた現象である。乳児がこのような諸機能を出せるような環境設定が重要である。

・揺れ感覚のムーブメント:大人のお腹に乗せてユラユラする。大人は、床に仰臥位になり、子どもをお腹の上に載せて子どもの顔を見つめながら、軽く動かして笑顔を引き出す。子どもの身体を支えながらユラユラと揺すって動かす。

・抱っこでのムーブメント:子どもを横向きで抱き(この時、頸に負担がかからないように、肩から頭に大人の手を当てる)ゆっくりとスイングする。子どもの表情を大切にしながら、心地よく揺らす。

・ロールマットを抱え込むようにして:子どもを長いロールマットの上に乗せて、その上で左右にゆっくり揺らす。子どもは、ゆっくりとした揺れに合わせて、姿勢の立ち直りや手を動かして保護伸展反応としての動作をする。これによりバランス感覚が育つ。

・トランポリン上に乗せて：小型トランポリンのキャンバスに、ロールマットを胸に当てて腹這い姿勢で乗せる。歌を歌いながら、ゆっくりやさしくキャンバスを上下に動かす。それに応じて頭部の挙上が見られる。適宜休みを入れながら繰り返す。

・操作性のムーブメント：子どもの手や脚は、最初は、運動器というより感覚器の役目を果たしている。遊具おもちゃなど色々なものに触れさせることで手指の触覚、筋感覚での感覚の処理ができるようになる。足（脚）も同じように、動かすことで上手に歩くための処理能力が育つ。これにより手や脚の動きはますます活発になる。

・物を手に触れさせる：子どもが触れる範囲に吊り遊具（音がでるもの）をたらす。子どもは、それに触れることで手を活発に動かし視覚集中も高められる。

Runners プログラム（対象：19～36ヶ月児）：子どもの発達（育ち）には、幾つかの節がある。一般的に5感覚を通して回りのものを見分けたり、聞き分けたり、食べたりして行動を拡大する。加えて、動きの感覚（前庭感覚）が、かなり大事な行動拡大の感覚である。3歳頃までの感覚運動が身に付く（経験できる）ことで、環境や事物へ適応や自分から働きかけられる自発性が発揮できるようになる。

・左右にゴロゴロ（布団の上で）・布団の上で転がる。布団に傾斜をつけることで、横転がりの機会を作り、全身での運動を促す。

・大人の膝で「みぎ、ひだり、大きく揺れる」：大人は子どもの顔が見えるように膝に乗せる。子どもの身体を支えながら、左右に傾けて動かす。慣れてきたら、ひょうきんに声を掛けたり、動きに変化を与えたりする。また、膝に乗せた子どもに上下動のムーブメントを楽しませるために「地震だ、地震だ・・・」と言いながら動すのもよい。

・大人の身体で「タカイ、タカイ」「ぶら下がり」：大人は、子どもの身体の脇に両手を入れて床から持ち上げ、子どもの大好きな「タカイ、タカイ」をする。子どもの反応に合わせて、「タカイ、タカイ」の高さや回数を変えたり、増やしたりする。

・木登り：大人は、自分の身体を大きな木に見立て、子どもをその木にぶら下がりをさせたり、大きな枝に上らせる。子どもがぶら下がりやすいように、高さを変えたりする。

・目をつぶって力を抜く：子どもを横たわった大人の腹部に寝かせて「ハイ、だらーんとして。どのくらい重くなったかな」と声をかける。全身の力を抜くのは難しいので「ぬいぐるみさんのように、やわらかくなって」などと言葉をかけると、そのイメージを抱きながら全身の力が抜けるようになる。

・パッと起きてヨーイスタート：パッと素早く起き上がらせる。はじめは丸くなった姿勢から次に腹這いから、さらに、仰向けの姿勢から素早く起き上がらせる。

・動きの模倣をさせる：手を叩いたり足を動かしたりして音を出す。また、正座、長座、あくら座等、姿勢の模倣を行う。この場合、座位姿勢の模倣（維持）ができれば「10までできるかな」と言って数えることで集中力を促す。

・もぐって取る：テーブルなどの下に転がったおもちゃやボールを子どもに拾ってもらう。また、また、椅子と椅子の間に張ったロープをくぐり抜ける。

・風船で遊ぶ：風船を自由に突いて遊ばせる。そこに大人が加わり、一緒に風船を突いて遊ぶ。物を操作する力が着くと同時に、物と自分の間の空間を意識するので知覚能力が育まれる。

（2）オーストラリア（ニューサウスウェルズ州）における乳幼児とその家族への支援

前述した通り、オーストラリア（ニューサウスウェルズ州）における乳幼児並びに障害のある子どもと家族への支援を明らかにするために現地視察を行った。ここでは、乳幼児とその家族のための総合的な支援施設であるインファンツ・ホーム；The Infant's Home（子どもたち

の家)について報告する。

インファンツ・ホームは、シドニー郊外にある幼児期早期介入センター、社会福祉サービス、医療サービスを統合させた総合的な施設で、乳幼児とその家族のために、彼らが必要とする保育、教育、養育や療育など様々な支援を提供している。インファンツ・ホームの歴史は古く、1874年に生後3週間の孤児の支援から始まった。その後、貧困に苦しむ母親と子どもや未婚で出産した女性(母親)と子どもなど、様々な困難を抱えた母と子の生きる権利を守るために、有志者と政財界からの援助により創設された革新的な組織である。1972年には、連邦政府からの資金援助を得てニューサウスウェールズ州で初めて、職業を持つ母親、特に母子家庭のための長時間保育施設を設立した。2013年には、小児科医療センターと早期介入センターを併設して、医療支援と共に、発達に遅れのある子どもや障がいのある子どものための言語療法、運動療法(ムーブメントセラピーや感覚統合など)、作業療法などのサービスも提供している。加えて、インファンツ・ホーム内にシドニー西部地域にある様々な幼児教育施設と連携するための幼児教育・保育センターがある。そして、2014年にインファンツ・ホーム内の小児療育センターがコミュニティ医療センターとなったことで、地域医療を支える新たな取り組みに着手しているとのことであった。インファンツ・ホーム内にある保育施設を視察した。保育は、5名から10名の小グループに保育者が1名から2名で、そのグループでその日の保育が展開される。我が国で見られる「○○組の集まりや一斉保育」のような形態はなく、あくまで数人のグループで保育者がその日の子どもの様子や希望、ニーズに基づいて保育を展開する。また、保育室の入口付近には、保護者が閲覧できるように子ども一人ひとりのラーニング・ストーリーが掲示されていた。

作業療法士、言語療法士、運動療法士、看護師などの専門職メンバーが保育に入り、障がいのある子どもやいわゆる気になる子どもへの支援を日々の保育の中で行っていた。中庭には、療育的支援につながる動的遊具が設置され、日常の保育に取り入れられていた。障がいの有無に関わらず、その子どもにとって必要な専門的支援を日々の保育の中で受けられることが自然であり、専門職と保育者との連携が一番取りやすいことから、専門職の保育への参加による直接的支援は、大変有効であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 安藤正紀・阿部美穂子・松川節理子・飯村敦子・上原淑枝・小林保子・是枝喜代治(2017): オーストラリア(ニューサウスウェールズ州)における乳幼児の支援と特別支援教育の現状. 児童研究, 第96号, pp33 - 42.

〔学会発表〕(計4件)

1. 飯村敦子(2018): 障害のある子どもの母親の「育児の喜び」に関する研究. 日本特殊教育学会第56回大会.
2. 飯村敦子(2017): ムーブメント教育による障害のある子どもの保護者支援. 日本特殊教育学会第55回大会.
3. 小林保子・飯村敦子・大橋さつき・河合高鋭・阿部美穂子(2016): インクルーシブ保育のあり方を考える. 日本特殊教育学会第54回大会.
4. 庄司亮子・飯村敦子(2016): ムーブメント教育による家族参加型子育て支援に関する研究. 平成27年度日本児童学会学術研究集会.

〔図書〕(計1件)

1. 是枝喜代治・飯村敦子・阿部美穂子・安藤正紀(2017): MEPA-R 活用事例集. 日本文化科学社, 総ページ数 251.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。